石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第329号　平成23年3月1日発行

特集展示

■ 前田昌彦展　～いざない～　　第３展示室

特集展示

■ 刀剣の美　加州刀を中心に　　第２展示室

ステルスとAyaka　前田昌彦　―前田昌彦展―

石川県指定文化財　刀
銘加州住兼若　三代辻村兼若
江戸時代17世紀―刀剣の美―

■ 前田家の天神信仰と文房具　　前田育徳会尊経閣文庫分館

- コレクション展示　主な作品
- 3月の企画展示室
- 企画展Topics
- 図書コーナー紹介
- 平成22年度開催の展覧会を振り返って
- ミュージアムレポート
- 行事案内
- 所蔵品紹介

前田育徳会尊経閣文庫分館

前田家の天神信仰と文房具

2月11日（金・祝）～3月26日（土）
会期中無休

前田育徳会尊経閣文庫分館で開催中の「前田家の天神信仰と文房具」の中から、今月は文房具について紹介します。

文房具は机上にある書画のための道具ですが、書を尊び、文人を理想のスタイルの一つとした中国では特に発達し、多彩で多様な文房具が作りだされました。

「文房四宝」とされる筆・硯・紙・墨のほか、わが国の文房具にはあまり見ない硯屏、多彩な素材を用い技法を凝らして作られた多種多様な水滴類、小型で愛くるしい動物やユーモラスな姿をした各種の文鎮類、螺鈿で唐草や草花文をあしらった豪華な印籠や文庫など実用性とともに書斎の愛玩品としても鑑賞にふさわしいもので、それらは希少な素材に工人が精妙を尽くして作られたものが少なくありません。

こうした文房具の収集は、唐物への尊崇が熱心だった江戸時代の風潮に添って、文人のたしなみとして進められました。前田家では歴代藩主が文房具に心を寄せた関係上、数多くの品々が伝わっています。中でも三代藩主利常によって集められ、愛用された名品の数々は一言で文人大名といってしまうよりも、寛永文化の担い手の一人であった藩主の趣味・嗜好や教養の高さ、文化創造に対する意気込みを示すものと言えましょう。なかには遠州が所持していた「銅鍍金翡翠形水滴」などの逸品も含まれることから、遠州の影響が茶道具にとどまらず文房具にまで及んでいたと考えられます。

銅鍍金翡翠形水滴

第２展示室

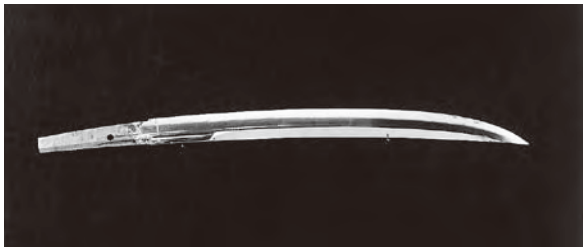
刀剣の美 加州刀を中心に

2月11日（金・祝）～3月26日（土）
会期中無休

今回の展示では鎌倉時代の作品として「短刀 無銘正宗」正宗作、「太刀 銘一」景安作、「短刀 銘国光」新藤五国光作、「太刀 銘貞宗 号日本丸」伝 貞宗作、「脇指 無銘近景」近景作、「短刀 無銘義弘」郷 義弘作以上六口を展示し、室町時代の「刀 銘備州長船則光作」則光作を加えて加州刀につなげます。

加州刀の成立期は、室町時代十五世紀前半期頃と考えることができます。今回は十五世紀から十六世紀の加州刀として藤嶋友重作の「刀 銘藤嶋友重」、「脇指 銘藤嶋友重」、「脇指 銘藤嶋友重」、家次作の「刀 銘家次作」、「刀 銘家次」、「刀 銘加州藤原住家次」を展示し、加州刀の基盤を整備した刀工の業績の一端を紹介します。さらに十六世紀の「刀 銘家重」家重作、「刀 銘勝家」勝家作、「刀 銘勝光」勝光作、「刀 銘勝光」勝光作、「刀 銘清光」清光作、「刀 銘景光」景光作以上六口を加えて、室町時代の加州刀（古刀）の大まかな流れを紹介したいと思います。

やがて江戸時代にはいると、刀剣は武器としての用途以上に武家のステイタスを象徴するものとしての意義を強めていきます。江戸時代の加州刀（新刀）を代表する刀工ともいえる辻村兼若は、そうした時流を巧みに捉えて手腕を発揮しました。それゆえに、前回と今回の「美術館だより」の表紙に初代と三代の作品を取り上げた次第です。今回新刀の展示は、この二口のみとなります。

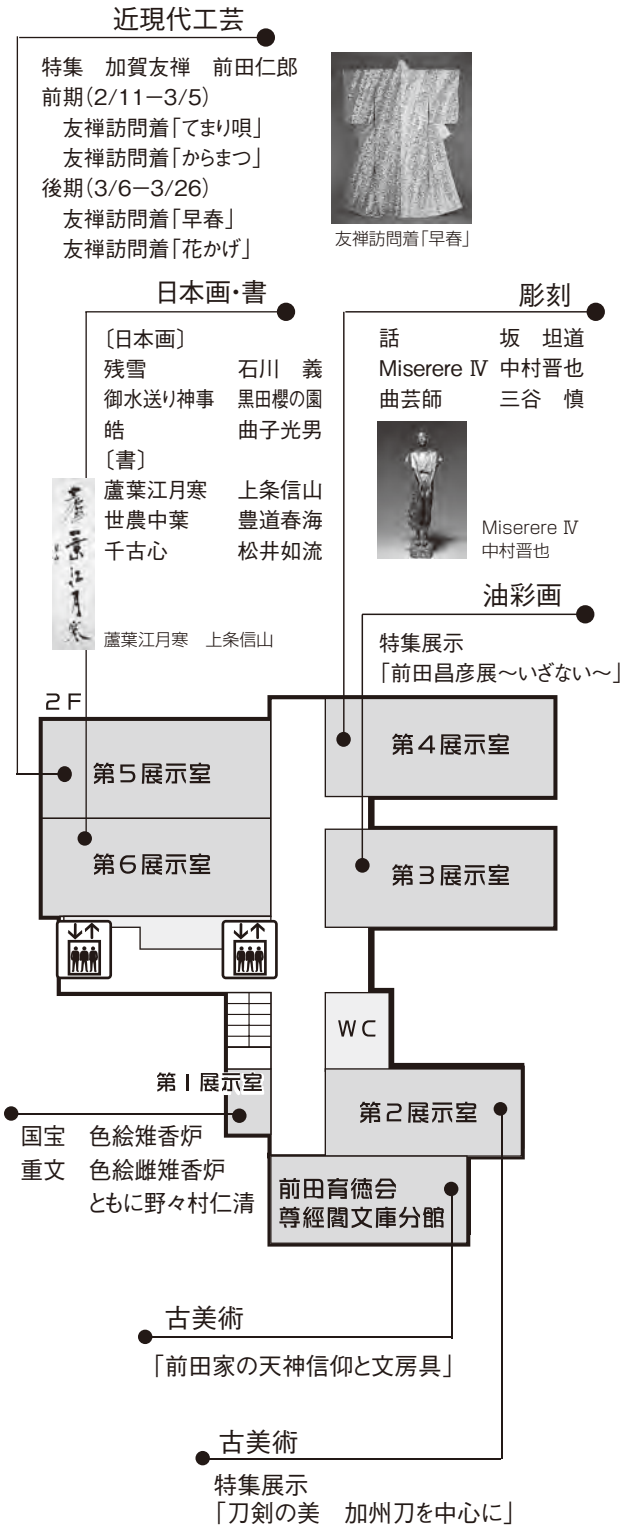


短刀 無銘義弘 郷 義弘作 鎌倉時代 14世紀

2F コレクション展示

主な展示作品

2月11日（金・祝）～3月26日（土）
会期中無休



第３展示室

前田昌彦展 ～いざない～

2月11日（金・祝）～3月26日（土）
会期中無休

前号に続いて前田昌彦展を紹介いたします。今回展示中の十八点の作品を順を追って見ていきますと、初期の「一隅（パリのアトリエ）」や「画室Ⅰ」などの〈静物〉から近作に至るまで、スタイルの変遷はあるものの、一貫して画面の絵解き性、ないし物語性が伺えます。

たとえば、「１９９１」という二〇〇号の大作があります。画面には男達の争う姿やでっぷりと太った人物、椅子、猫や少女、螺旋階段などが色面を区切って描かれています。今回は作品ごとに作者の制作の思いをキャプションに添えました。そこには『クルド人が迫害を受けていた時期、日本はバブル経済の終焉を迎えようとしていました。そのような複層した社会の中で、娘が成長してゆく姿や、パリの安宿の女将、アールヌーボー調の椅子、猫、新都庁など混在した情報を併存させて当時の時代を表現した作品』とあります。

タイトルの〝１９９１〟は一九九一年で、その年は湾岸戦争勃発に始まりソビエト連邦崩壊で終わるという激動の年でした。むろん、本作が四月末開催の国展出品作なので、年末の出来事を描くことはないのですが、その予兆はあったわけです。椅子は権力の象徴、女将は変転する為政者、画面の中心を空にして、それを巡るように事物を配したこの作品には、こう見立てさせるものがあります。

ぜひ作者の詞書きとともに、絵を読み解いていただければと思います。

1991

三月の企画展示室

第8・9展示室

第17回 北陸国展

3月1日(火)～6日(日)　会期中無休

これまでの北陸国画グループ展を北陸国展と改称し、第十七回展を開催いたします。出品者は北陸在住及び、ゆかりのある国展（国画会）出品者等で構成されています。国展は毎年春に国立新美術館で開催され、今年で第八十五回を迎える歴史ある公募団体です。

今回は、絵画部二十七名、写真部二十六名が力作、大作を発表するとともに、広坂別館にて同絵画部出品者の前田昌彦小品展、写真部受賞者展（東京）と写真部会員準会員秋季展（東京）の巡回展示も行いますので合わせてご高覧くださいますようお願い申し上げます。

◇入場無料
◇後援　北國新聞社　テレビ金沢
◇連絡先　河北郡津幡町七野一〇七―一
本田正史
TEL　〇七六―二八八―一八一九

第8・9展示室

第33回 一創会展金沢展

3月9日(水)～14日(月)　会期中無休

新春、銀座洋協にて開催された本展の中から、基本作品、受賞作品及び石川県内作家の力作八十点を選び、金沢での記念巡回展を開催いたします。

何者にも制約されない自由な作品群をご鑑賞ください。

◇主な出品作家
横塚　繁　今村昭寛　鮎貝周三　寺西武久
西山英二　上野光子　蓮井廣幸　梅沢曜光
虎井　修　松本陽子　飯田祐三　国友　博
水上正子
◇入場料　一般　五〇〇円　大・高生　四〇〇円
中学生以下無料
（団体は各一〇〇円引）※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金になります。
◇連絡先　小松市二ツ梨町ク―十九―十五
寺西武久
TEL　〇七六一―四四―四二三五

第7展示室

現代工芸50年のあゆみ 秀作展

3月16日(水)～24日(木)　会期中無休

永く日本の工芸美術界の中心にあって、その時々の『今』を意識した作品群を発表し、また広く海外へも展開してきた現代工芸美術家協会。設立以来五十年の節目に、その活動の中にあって大きな足跡を標した故蓮田修吾郎、高橋節朗ら先達から現在最先端で活躍する大樋年朗、奥田小由女ら気鋭の代表的な作品七十点あまりを一堂に展示致します。

多様な工芸素材を駆使し、芸術の域にまで高めた形と色彩の造形世界を是非ともご高覧ください。

◇入場料無料
◇連絡先　東京都台東区上野七―九―十五
車坂ビル五〇二号
社団法人　現代工芸美術家協会
TEL　〇三―三八四一―八三一四

第8・9展示室

'10玄土社書展
〈併催 大澤雅休2還暦記念遺墨展〉

3月19日(土)～21(月・祝)　会期中無休

玄土社の一年間の活動を集約する'10玄土社書展は「今」を表現する抽象作品39点、古典臨摹作品24点を展示。併催は大澤雅休2還暦記念遺墨展です。

表立雲は、昭和20年富山県砺波市に一時疎開された大澤雅休との出会いは革新的な書への開眼の一歩となり、その精神は今日の玄土社に受けつがれています。展示作品は20余点。北陸ではじめての企画です。

◇会期中の行事「表立雲トークタイム」
テーマ　書と絵画との熱き時代'45～'69
日　時　三月二十日（日）午後一時三〇分
◇入場無料
◇連絡先　金沢市本多町一―七―十五
玄土社主宰　表立雲
TEL　〇七六―二六三―〇一二二

企画展Topics

セルフ・ポートレイト展 ―キャンバスの中の巨匠たち―

平成23年4月24日（日）～6月12日（日）

セルフ・ポートレイト（自画像）は自分の顔かたち、姿を描いたものです。初学の頃、鏡を見ながらそこに映る自己を描くという気恥ずかしさを突き抜け、畏れや不安、気負い、願望、大望などさまざまな思いをないまぜに、自己の顔を描きあげたという経験を持つ画家は多いと思われます。そして初学を過ぎると大半の画家は自画像から離れていきます。ところが、ある種の画家は繰り返し自己を描き続けるのです。近年では鴨居玲がその代表者といえましょう。

美しく、優しく、高貴に等々、他者を描く際の条件は一切なく、趣くままに自己の深奥を探ることとなります。それ故、自画像は巨匠名匠の心の内をたどる格好の作品といえます。

本展は、日動美術財団の協力を得て、梅原龍三郎や安井曾太郎、藤田嗣治、佐伯祐三、中川一政などの巨匠から、奥谷博、松樹路人、稲垣考二など、現代を代表する画家に、本県出身の宮本三郎、鴨居玲、高光一也、新保甚平、開光市らの自画像と作品で構成します。また一部の画家では創作の秘密を窺わせるパレットも組み合わせ、六十四作家一二〇点の展示となります。

自画像　佐伯祐三　大正6年　日動美術財団

明治から現代まで、これだけまとまった数の自画像が並ぶことは、そうそうないことで、作家の活動期を追ってみていきますと、自己を思いのままに描いた自画像といえども、共通した時代の嗜好が感じられ興味深いものがあります。巨匠たちを身近に感ずる絶好の機会です、ぜひご覧ください。

図書コーナー紹介

当館には、現在三千点を超える美術作品が収蔵されていますが、それらは当館での展示はもとより、他館へ貸し出しされて展示されることもあります。そうした際に作成される展覧会図録に、当館のコレクションが紹介される機会もしばしば見受けられます。ここでは、最近送られてきた展覧会図録の中から、当館の所蔵品が掲載されているものを紹介してみます。

○「日本のわざと美」展
―重要無形文化財とそれを支える人々―

会期：二〇一〇年十一月三日～十二月五日
会場：山口県立萩美術館・浦上記念館
内容：文化庁の主催のもとに、重要無形文化財に指定された作家・団体の工芸作品を集めて、毎年開催されている展覧会です。当館からは、金工の金森映井智作「鋳銅象嵌六方花器」、隅谷正峯作「脇指」、西出大三作「木彫截金彩色合子『千鳥』」を出品しました。

○「追悼　人間国宝　三代　徳田八十吉展
―煌めく色彩の世界―」

会期：二〇一一年一月二日～二月十三日（のち巡回）
会場：そごう美術館（のち全国六会場を巡回）
内容：一昨年亡くなられた三代徳田八十吉氏の代表作を中心に、古九谷や初代・二代八十吉氏の作品を加えた回顧展。当館からは、三代八十吉氏の作品二点に、古九谷の優品四点を出品しています。

○「美へ挑む　うるしの輝き
―近現代日本の漆芸―」

会期：二〇一一年一月十五日～二月十三日
会場：浦添市美術館
内容：本展は、浦添市美術館の開館二十周年、浦添市市制施行四十周年を記念して開催される展覧会で、琉球漆器の産地・沖縄をはじめ日本各地の漆芸作家の作品を集めています。当館からは、松田権六、前大峰、大場松魚、寺井直次ほか計十一点が出品されています。

以上、ご紹介した図録は、当館一階情報・図書コーナーにて閲覧できます。

平成22年度開催の展覧会を振り返って

当館では、一階の企画展示室や二階のコレクション展示室で多くの展覧会が開催されました。それらの中から当館主催の企画展を振り返ってみたいと思います。

春の「石川県立美術館の半世紀の歩み」は、昭和三十四年の兼六園小立野口に開館した石川県美術館から五十一年を数え、その間に所蔵品が三〇七三件となり、その中から評価の高い秀作二九五点を選りすぐって開催したものでした。企画展示室三室に加えて、前田育徳会尊經閣文庫分館を除くコレクション展示部門の全展示室を使用して一挙に公開しました。名作の数々を古美術・近現代純粋美術のジャンルごとに鑑賞出来るまたとない機会でした。

鑑賞者から、藩政期から続く美術工芸の歴史と作家の層の厚みを見ることができ、とても一度で味わいつくせないとの声が寄せられました。また、毎週日曜日のギャラリートークのほか、当館館長による講座では、コレクションやコレクターの逸話、作家の人となりなど興味深い話がありました。参加された方々からは作品・作家に親しみが深まり、展観をよりいっそう堪能することができたとの感想をいただきました。

秋の「加越能の美術―縄文から江戸時代までの名宝―」は、藩政期に加越能と呼ばれた石川・富山両県にゆかりの国宝・重要文化財を含む文化財・名宝約一五〇件を展観するものでした。

能登真脇遺跡出土の縄文式土器の展示では規模と出土品の多さに鑑賞者は一様に驚いた様子でした。また古代中世の宗教美術には、普段は信仰の対象である仏像を間近に鑑賞することができて大変よかったとの声が数多くよせられました。

江戸時代では、前田家の文化政策によってこの地区に展開した加賀文化の粋を感じとっていただきました。

また二階前田育徳会尊經閣文庫分館でも加賀藩の美術工芸が展示され、これらの文化財を通じて前田家が加賀文化に果たした役割の大きさとそのすばらしさに魅了され、石川・富山の地域郷土をあらためて認識していただけたものと思います。

新春「加越能の美術　石川・富山の美100選―明治から現代の絵画・彫刻・工芸―」は、秋季に開催した「加越能の美術―縄文から江戸時代までの名宝―」の続編というべき展観でした。維新で大きく転換する明治期を起点に大正・昭和・現代に至る石川・富山両県の美術工芸の展開を名匠・名工の対照などを織り交ぜ紹介したもので、一二二作家・一二七点の展示でした。隣同士で、しかもかつて長く前田家の文化施策を受けていた両県の近代現代作家の作品を対照させるという展覧会は当館でも初めての試みでした。

この展示を通じて、優れた作家達の違いや共通性をご覧いただけたことと思います。一方、風土と美術の関連性や今後の展望をも予測させる一面も見られ、石川・富山の持つ文化や芸術性の違いも感じられたかと思います。

石川県立美術館の半世紀の歩み

加越能の美術
―縄文から江戸時代までの名宝―

加越能の美術
石川・富山の美100選
―明治から現代の絵画・彫刻・工芸―

ミュージアムレポート
キッズプログラム「彫刻をつかまえよう！」

一月二十三日（日）、キッズプログラム「彫刻をつかまえよう！」と題してコレクション展「近代彫刻―空間と構成の美」の鑑賞を行いました。今回は、自分の身体を使って彫刻になるなど体感しながら彫刻を理解していただく内容です。親子が触れ合う機会となるよう、身体をくっつけ合っていろいろなポーズをとるなど、親子一緒に活動していただきました。いきなりの展示室での身体表現に戸惑っていただご家族も、次第に活動自体を楽しんでいただき家族のチームワーク力も増してきていました。そして、展示作品とコラボレーションする最後の活動では、どの家族も選んだ展示作品にご家族のアイディアをプラスしたユニークなポーズと、とびきりすてきな表情で記念撮影に臨んでくださいました。

参加されたご家族には、身体表現による鑑賞の新鮮さと、雪が降る寒い日に今回のプログラムのように暖かい展示室で身体を使ってさらに暖かくなるという冬にぴったりな活動ということで好評をいただき講座を終了しました。ご参加のみなさん、ありがとうございました。

次回のキッズプログラムは、三月六日（日）午後一時三十分より、特集展示「前田家の天神信仰と文房具」にちなんで、「お殿様の文房具」と題した鑑賞講座を行います。参加無料です。奮ってのご参加をお待ちしております。

【二十二年度に開催したキッズプログラム】

五月三十日　「きじっ子茶会」
七月三十日、八月二日、八月四日　「夏休み制作体験講座」
八月二十日　「バックヤード体験ツアー うらがわ美術館」
八月八日　「キッズ★ふしぎハンター」
九月二十六日　「石川の工芸物語」
十一月二十一日　「アートゲーム大作戦！」
一月二十三日　「彫刻をつかまえよう！」
三月六日　「お殿様の文房具」（次回）

三月の行事予定

■土曜講座　十三時三〇分～　美術館講義室　聴講無料

五日（土）　「石川県の工芸　人間国宝とその周辺（3）截金」　寺川和子学芸主査
十二日（土）　「小絲源太郎―その生涯と芸術―」　織田春樹学芸主査

■キッズ☆プログラム　十三時三〇分～　講義室集合　参加費無料

六日（日）　鑑賞講座「お殿様の文房具」親子向け、小学生対象の鑑賞講座です。

■映像ギャラリー　十三時三〇分～　美術館ホール　聴講無料

二十日（日）　「世界・美の旅9　プルシャンブルー～世界を巡った謎の青～」（30分）
「世界・美の旅10　ピカソ～若き日の天才画家～」（30分）

次回の展覧会

第3～9展示室	第六十六回　現代美術展（日本画・彫刻・工芸・写真）	会期四月二日（土）～四月十九日（火）
前田育徳会尊経閣文庫分館	花鳥の美―絵画と彫度―	会期四月一日（金）～五月八日（日）
第2展示室（古美術）	花鳥の美―絵画と工芸―	

ご利用案内

■コレクション展観覧料
一　般　三五〇円（二八〇円）
大学生　二八〇円（二二〇円）
高校生以下　無料
※（　）内は団体料金

■今月の開館時間
午前九時三〇分～午後六時

■カフェ営業時間
午前十時～午後七時

■三月の休館日
二十七日（日）～三十一日（木）

「金銀象嵌龍虎人物図燭台」きんぎんぞうがんりゅうこじんぶつずしょくだい　明治時代(19世紀)1対 口径8.3cm 底径11.5cm 高さ32.8cm　所蔵品紹介214

米沢弘正　よねざわひろまさ　嘉永4年(1851)～大正12年(1923)

中央部分の四区画に、龍、虎、唐人物、唐子を象嵌と彫金で表し、花器状をした一対の蝋燭台です。三個の獅噛（しがみ）を持つ基台部分の下部から主なものを紹介すると、銀・素銅の象嵌による『流水に鯉図』、彫金と銀象嵌による蓮根・里芋・人参・百合根などの『蔬菜図』、『前述の四図』、彫金と銀象嵌による『雲鶴図』が表され、それらの間には銀象嵌による各種の線文様が配されています。四区画の意匠のうち、龍図は片切り彫り、毛彫りに金・銀・素銅を象嵌したもので、虎図も同様の技法による竹林の虎です。唐人物図は梅樹の下で巻子を持つ人物がたたずむ姿を、片切り彫りを主とする彫金と金・銀・素銅の象嵌により表現しています。唐子図も同様の技法により、唐子が鶴を養う姿を表現しています。この二図は、単独の意匠ではなく、二図で西湖の孤山に住し、詩作に興じ、一歩も湖外に出ず、梅を愛し、鶴を養い、客があれば童子に鶴を放たせたという、宋代の高士林和靖の『梅鶴高士』の図です。両方の基台の裏側には、

大日本帝国
　　米澤弘正 の彫銘があり、明治時代になって石川懸金沢

てからの作品であることがわかります。欧米への輸出を目指して、東洋趣味にあふれた、一対という形態の燭台にしたものと思われます。

米沢家は、前田家のご用を勤め、代々白銀（しろがね）屋と称し、白銀細工、刀装金具などの製作を家業としていました。弘正は明治十年設立の銅器会社では職工棟取を勤めています。三十七年のセントルイス万国博覧会での受賞をはじめ、各種の博覧会で活躍しました。

※第5展示室で展示中。

平成二十三年度 友の会会員 受付開始

三月一日（火）より、平成二十三年度石川県立美術館友の会の会員募集が始まります。コレクション展示室の無料観覧、企画展の招待券進呈、入館料の割引、そして美術館主催行事のご案内や展示の詳細を記載した、毎月の美術館だより送付など、たくさんの特典があります。

年会費は二〇〇〇円。会員の有効期限は平成二十三年四月一日から二十四年三月末日までの一年間です。申込方法は、直接美術館までお越しいただくか、郵便振替での口座振込のどちらかとなります。定員の一五〇〇名に達し次第、申込を締め切りますので、現在会員の方も、お早めに更新手続きをお願い致します。

新しい会員証は、今年の干支にちなんで、江戸時代前期に活躍した絵師、久隅守景の「笹に兎図」を使いました。身を寄せ合う愛らしい兎の姿を、笹の枝とともに墨一色で巧みに描いた、平成二十一年の企画展「久隅守景展」以来、特に人気の高い作品の一つです。同作品のクリアファイルや一筆箋も新しく発売されています。

石川県立美術館だより 第329号
2011年3月1日発行〈毎月発行〉
〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580　Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています